タイ語な訳だけど、なんのためにタイ語を学んできたんじゃい（おみくじを読むために決まっている！）ということで、がんばって読んでみましょう。なお、おみくじは、もともと中国から伝わってきたであろう由緒からして、たいていのおみくじには漢文も併記されている。タイ語が読めないという可哀想な人は漢文でがんばりましょう！　タイ語を学んだ日本人は、タイ文字も漢文もどちらも読めるから、おみくじ選手権では有利だよね！（そんな選手権、ないけども）

ということで、軽い占いはタイではいろいろと揃っているし、雑誌や新聞の星占いは愛大に居ながらにして見られるので（ちょっと古いけども）、是非、楽しんでみてください！

ミャンマー人と仏の道

経営学部　土屋　仁志

ミャンマーは世界屈指の仏教国だ。国内どこに行ってもパゴダ（仏塔）が無い場所はない。村にひょっこりたたずんでいるコンパクトなもの、険しい山のてっぺんにあってどうやって造られたのか想像をかきたてられるもの、なぜこのサイズに決まったのかと思いたくなるほど巨大な寝釈迦仏、ビルマニシキヘビが住み着いたもの、宝石がちりばめられ荘厳で黄金に輝くものなどパゴダの種類はバラエティに富む。ミャンマーの人々が仏教を体現するうえでこのパゴダはとても重要な役割をはたしている。例えば「連休はどう過ごしたか？」と聞くと「家族全員でエヤワディのパゴダにいってきた」とか「どこそこのパゴダで瞑想していた」とかいう返事が返ってくる。観光でもなく、宗教上の“義務”でもない。それは彼らミャンマー人にとって生活の一部であり、日常であり、人生の核心でもある。トラックの運転手は運転中にパゴダをみつければ、合掌して拝みたいところを我慢して、ハンドルをコントロールしながら両手の人差し指と親指を使ってパゴダ型の三角形を作り、運転の安全を確保しながらお祈りする。過去、軍事政権下で入国条件がビザの申請によって厳しく管理されていた時代でも“Meditation Visa（瞑想ビザ）”なるものが発行されおり、仏門に接しようとする外国人には寛容であった。テレビでは仏教専門のチャンネルがあったり、街なかでイヤホンをつけている人が実はMP3で高僧の説法を聞いていたりとか、ミャンマーでは仏教にかかわるエピソードは事欠かない。

ミャンマー人の信仰の深さの根本には「現世で“徳”を積まなければ来世は人間として生まれ変わることができない」という仏教の輪廻転生にまつわる教えがある。信仰を怠り、この世で悪事を働けば来世は犬や猫、虫などに生まれ変わってしまうことをとても恐れている。だから『アンタ来世、人間になれないよ』などというジョークはミャンマーでは洒落にならない。ともあれ、“徳”を積む方法はいくつかある。そのメインとなるのが“お布施”と“出家”である。まずは“お布施”。所得が多かろうが少なかろうが、給料１個月分相当の金額をお寺に

納めることは珍しくない。よく会話の中で「先週、あそこのパゴダに20万チャット（約１万4,000円）のお布施をしたんだ」とか、「このパゴダの貯水タンクは私が寄進したものなんだ」とかいう話がでる。日本の金銭感覚でいえば、20万円を越える金額を毎年どこかのお寺に収めるということになる。次に“出家”であるが、ミャンマー人は男女を問わず人生に数度“出家”する。“出家”といっても期間は自分で決めるため、１日から数年間とその期間の幅は広い。ただし、その長短に関わらずしっかりと剃髪して、その期間中は僧侶として過ごす。会社員などは通常３月の水掛祭り期間の連休を利用して“出家”するので、連休明けになると男女を問わず剃りあげられた頭が街中に目に付く。あまりにも日常的なことなので誰かの剃りあげられた頭を見ても「どうしたの？出家したの？」などという会話が交わされることはない。ミャンマーでの僧侶の地位は高く、人間ではない身分と定義されている。また話す言葉も一般的なミャンマー語とは異なり、パーリ語を多用した言葉が使われる。僧侶の一日は、午前３時に起床してゆっくりと動きはじめ、４時に座禅、５時に朝食、休憩を挟んで７時から托鉢にでる。托鉢では僧院近隣の家々を１時間ほど回って食事の一部を分けてもらう。慣れていない者にとってこの托鉢は一種の苦行といってよい。地面はぼこぼこ、よくわからない極小の木の実が散在し足の裏に刺さる。あまりにもの痛みの連続で、トランス状態にはいってしまいそうになる。一方、ミャンマー人たちは足の裏の皮がゴム底みたいに硬いので何も感じないらしい。一度、素足で踏まれたことがあるのだが、ブーツのかかと部分で踏まれたかと思うぐらい硬かった。話を戻すと托鉢後は休憩を挟んで座禅、10時に昼食となる。昼の12時を越えると夜の12時まで食物を口にすることはできないため、原則１日２食となる。食事のメニューは托鉢で受け取ったもので、肉であろうが魚であろうが何でも食べる。自分自身が殺生していなければ動物を食しても構わないという解釈だそうだ。そしてかなりおいしいので太っている僧侶は結構多い。食後は僧院の掃除や修繕を行い、また瞑想を行って、その後昼寝。夜７時から読経および座禅で１日

バゴー地方域の Shwe Bon Thar Muni Pagoda（2017 年 5 月撮影）

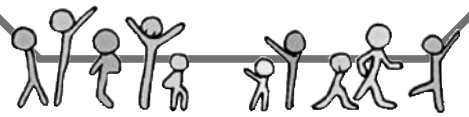
が終わる。

このように仏教とともに人生をすごすミャンマーでは、ほとんどの人がお経を覚えており、お葬式などでは僧侶の読経に合わせて参列者の全員がいっしょに唱える。その響きは厳かで清らか、まさになにか人の魂がゆっくりと天に吸い上げられて行くが如しである。死に場所について特別なこだわりがあるわけではないが、もしミャンマーで死んだら本当に成仏できるかも知れないと思ってしまった。

ブッダーン ダラァンナーン ゲッサーミッ
ダンマーン ダラァンナーン ゲッサーミッ
タンガーン ダラァンナーン ゲッサーミッ

セブの交通機関

国際コミュニケーション学部３年
川本　美結



私は2019年４月から６月にフィリピンセブ島に留学した。セブは常夏の島で独自の面白い文化をたくさん体験したが、今回はセブのユニークな交通機関について紹介する。

週末に留学仲間と“Lantaw Floating Native Restaurant”というフィリピン料理が楽しめる海上レストランに行くことになった。寮のある学校からはタクシーを往復でチャーターすると約3000ペソで行くことができるが、せっかくの留学なので現地の人が使う交通機関を使うことにした。まずは学校から車で15分ほどのショッピングモールまで、ジプニーというトラックの荷台に屋根付きの座席がついたような乗り物を使った。路線バスのような感じで運賃は７ペソだ。市民の足になっているが、窓もエアコンもないので車が止まった瞬間汗が噴き出てくる。モールからは長距離バンに乗り換えで、一人30ペソだ。このバンは11人乗りだが、フィリピンはそんなことは気にせずに、乗れるだけ乗せる。この時も16人ぐらい乗せて出発した。密着しすぎてほぼ身動きが取れない中、ファストフードを食べ始めたり、大音量で動画を見始めたりする乗客とともに渋滞した道を１時間ほどかけてバンステーションまで向かった。道路状況と車内環境の悪さで車酔いをしてセブで一番過酷な移動だった。バンステーションからレストランまではトライシクルというバイクの横にかごがついた乗り物を使って移動する。一人20ペソだ。陽気なおじさんの運転手と、風を切って走る爽快感とともに約10分でレストランに到着した。海上レストランでは沈む夕日を見ながらフィリピン料理を楽しんだ。帰りも来たまま帰れるかと思いきや、トラ

市民の足であるジプニー